「天満市場」なぜビルの中に？

大阪の商店街を訪ねることが、コロナ禍前には楽しみだった。天満周辺もその一つだ。商店街からすこし離れたところにある「天満市場」に立ち寄ったことがある。精肉や魚など多くの店舗が並んでいて、大きな市場をぐるりと回った。帰宅して地図を見ると、「ぷららてんま」と表記されていた。

日経新聞 9 日夕刊「とことん調査隊」に、JR 天満駅（大阪市）北側の飲み屋街にある複合高層ビル「ぷららてんま」がとりあげられていた。抜粋して紹介しよう。

1 階と地下 1 階には生鮮小売市場の天満市場が広がる。なぜ飲み屋街のど真ん中、しかもビルの中に市場があるのか。理由を調べてみた。

ぷららてんまは 28 階建てで、3〜5 階は駐車場、6 階以上は住宅だ。天満市場では、40 を超す業者が野菜や果物、精肉、魚といった専門店を運営している。

以前はアーケードの市場が広がっていたが、近所に駐車場が少なく、買い付け業者の路上駐車が問題となっていた。「市場に駐車場がない不便さを解決するためにぷららてんまをつくった」。天満市場商業協同組合の河部宏之理事長が話す。

1970 年代から再開発を検討していた。ただ「自ら資金を出す必要があり、実現は難しかった」（河部理事長）。そこで再開発事業として申請し、国や大阪府・市から補助金を獲得した。上層階の住宅部分を都市再生機構（UR）に売却することで資金を捻出し、2005 年にぷららてんまを開業した。市場を集約し、駐車場もつくった。

天満市場のルーツをたどってみた。文献をひもとくと、「1496 年に建立された石山本願寺の門前町が起源」との記載を見つけた。京橋南詰・北詰に青物市場ができると、周辺で移転を繰り返し、1653 年から天満橋に定着した。1931 年に福島区の大阪中央卸売市場に統合されて配給所になったが、太平洋戦争の空襲で焼失。49 年に現在の北区池田町の東洋紡工場跡地に再建された。

17 世紀後半から長く市場があった天満橋を訪ねた。今では川沿いに南天満公園が広がる。天満市場跡という石碑を見つけた。近くには、子どもを背負った女性の像も。「ねんねころいち 天満の市よ 大根そろえて舟に積む」。石碑に刻まれた天満の子守唄からは、川に面して水運に恵まれた当時の隆盛が伝わってくる。

江戸時代、大阪は天下の台所と呼ばれた。天満青物市場は堂島米市場、雑喉場（ざこば）魚市場と並び大阪の三大市場と称された。「幕府も大いに保護を与えたので隆盛に向かい、全市唯一の蔬菜果物の独占的な供給市場となった」（大阪天満卸売市場史）

（2021 年 11 月 11 日）